

残り少ない夏を借しむように、セミが懸命に鳴いている。今年は夏らしい日がほとんど無かっただけに、鳴き声は悲痛だ。早く迎れ合いを見つけねば、生殖の機会を逸してしまう。生命を次世代につなぐために、虫たちも必死だ。

奥会津の秋の訪れは早い。ススキやコスモスの花が風に揺れ、小川の水もすっかり冷たくなった。職場や家庭では、マツタケなど秋の味覚の話で持ちきりだ。夜になると庭先から、もうスズムシやオロギの音が聞こえてくる。

そよ風に揺れる木々のざわめき、小川のせせらぎ、小鳥や虫たちの合唱……。東京で六年ほど暮らした経験のある私は、そんな山舎の「音の風景」がとても貴重に感じる。自動車の排気音や電車の振動音、商店から流される節操のないBGMなど、都会の喧騒（けんそう）には耳を覆いたくることが多かったからだ。私が昭和村を初めて訪れた時に感じた限らない郷愁は、実はこうした「音の風景」にこそあったのではないかと最近思う。もちろん、目に見える村の景観も素晴らしい。それは言うまでもない。なぜ都会は、こうした大切な「音の風



1993(5) 9, 19.

「環」を破壊してしまったのだろうか。私はそれが残念でならない。もちろん「静寂」だけに価値があるのではない。心躍る音楽や活気ある人々の営みには、ある程度の騒音は付きものであって、それまでを否定するつもりはない。祭りの夜の騒音は、むしろ心地よいものだ。だが、恒常的に喧騒が続く環境に身を置かねばならないとなると話は違う。神経がいら

ない。精神障害をも引き起こしかねないからだ。ヘッドホン着用の携帯ステレオを都会の若者が愛用するのは、喧騒からの自己防衛手段のように私は思う。

〈環〉の思想

心の故郷ともいえる「音の風景」を破壊した力は何だったのか。それは、都市化と産業化の進行に伴う自然破壊によるものだ、と言うこともできよう。利潤の追求と生産効率を最優先する工業社会

の機械音が、自然界の音色をかき消したのだ、と言うこともできよう。が、根本的には〈環〉の思想の欠落によるところが大きいように思う。

〈環〉の思想は、「環境」と「循環」の二本柱からなる。日本は明治維新以降の近代化の過程で、富国強兵と殖産興業を旗印に国力の増強を最優先した。強さへの欲望には限りがない。とりわけ戦後

また、「大量生産—大量流通—大量消費」の枠組みは、ある程度の生活レベルの向上をもたらしたものの、大量のゴミを発生させ、その処理に四苦八苦する事態をもたらした。特に焼却処理不能な産業廃棄物は新たな公害をもたらし、有害物質の流出が人体の健康を脅かしているのは周知の事実だ。生産力を最優先させたことによる資源の枯渇と過剰な廃棄物の発生は、自然界の「循環」のリズムを狂わした結果であることはだれの目にも明らかだろう。この悪循環は、心の故郷である「音の風景」まで奪ったのである。



藤森 弘

日本の近代史は、裏返すと人間の物欲の無限拡大の歴史ともいえよう。物には満ち足りていても、絶えず生存の危機に脅かされるとは何とも皮肉である。この悪循環を断ち切るには、江戸時代には比較的健全に作用していた〈環〉の思想に立ち返る必要があるように思う。工業化した社会では最も遅れた農山村ではあるが、〈環〉の思想を機軸に据える時、最も優位に立っていることが分かるだろう。都市と農山村の逆転の契機は、ここにもあるのだ。

(昭和村喧丸・フリーライター)